

研究

6 か月児をもつ母親の精神状態に関する研究 (第1報)

— 不安、抑うつと育児ストレスとの関連から —

堀田 法子¹⁾, 山口 (久野) 孝子¹⁾

〔論文要旨〕

50人の母親を対象に質問紙調査を行い、育児指導の参考とするため、6 か月児をもつ母親の精神状態を明らかにし、育児ストレスとの関連性を分析した。6 か月児をもつ母親の STAI, SDS の平均得点は正常範囲であったが一般正常女性より高かった。子ども関連育児ストレスは SDS と、母親関連育児ストレスは STAI, SDS と有意な正の相関が認められた。中でも子どもの不快な状況や睡眠に関すること、子どもとの関係や接し方に関することに大きく関係しており、それらをサポートしていくことが重要である。

しかし、「情報が多くて混乱する」については、非常に多くの母親が悩んでいたが、精神状態に影響していないことが明らかとなった。

Key words : 6 か月児をもつ母親, STAI, SDS, 子ども関連育児ストレス, 母親関連育児ストレス

I. 緒 言

近年、育児期における母親を対象とした研究が盛んに行われ、多くの母親は不安やストレスを抱えながら育児を行っている現状が明らかとなっている。牧野¹⁾²⁾は育児行為の中で持続し、蓄積された不安状態を「育児不安」と定義して調査を行い、不安の高い群の割合は多く、専業主婦にその傾向が強いことを報告した。川井ら³⁾⁴⁾は育児不安の本態と考えられる「育児困難感」を子どもへのネガティブな感情を中心とする能動外罰的心性と、育児への自信のなさを中心とする受動内罰的心性の2つのタイプからなることを明らかにし、その構造は0歳児の母親では後者のみ、1歳児以降は両方のタイプがみられるなど子どもの年齢によって異なることを報告した。佐藤ら⁵⁾は「育児関連ストレス」

の構造分析、および抑うつ健康度との関連性について検討を行った。その結果、「育児関連ストレス」は単一なものというより、「子ども関連育児ストレス」、「母親関連育児ストレス」という2つのタイプに分類され、両変数間に強い相関が認められた。抑うつとの間にはいずれの変数とも有意な関連が認められ、どちらかといえば子ども関連育児ストレスより母親関連育児ストレスとの間に強い相関関係がみられた。この他、奈良間ら⁶⁾や吉田ら⁷⁾によるものがあるが、育児期における母親の心理的・精神的状態を示す概念や定義は様々であった。

また、育児期の母親に関する研究は、産後1週間以内や1か月などの産褥期^{8)~11)}、3・4か月¹²⁾、1歳6か月¹³⁾、3歳¹¹⁾¹⁴⁾¹⁵⁾の乳幼児をもつ母親を対象としたものが比較的多い。しかし、寝返りやお座り等の運動発達や離乳食による食

A Study on the Mental State of Mothers with 6-month-old Child (Part 1)
~The Relationship among Their Anxiety, Depression, and Stress about Nursing~
Noriko HOTTA, Takako YAMAGUCHI (KUNO)

[1626]

受付 04. 4. 1

採用 04.12. 2

1) 名古屋市立大学看護学部 (研究職)

別刷請求先: 堀田法子 名古屋市立大学看護学部 〒467-8601 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1

Tel/Fax : 052-853-8050

事形態の変化、また人見知りや夜泣きが現れるようになる6か月児をもつ母親に関する調査は少数であった。育児上の相談内容においても食事や発育・発達に関すること等があげられていること¹⁶⁾から、この時期の母親の不安は決して弱くないと考えられる。

そこで、本研究は6か月児をもつ母親の精神状態を既存の尺度であるSTAI, SDSを用いて明らかにするとともに、育児ストレスとの関連性について分析し、育児指導の参考として検討した。

Ⅱ. 研究方法

1. 対象と調査方法

N市の保健所が主催する育児支援事業の参加者に調査の趣旨を説明し、同意が得られた50人の母親を対象に質問紙調査を行った。調査は乳児が6か月を迎える1週間前に母親に自記式の質問紙を郵送配布し、郵送により回収した。質問紙の回収数は39人(回収率78.0%)であった。

調査内容には、精神状態として日本版 State-Trait Anxiety Inventory (以下, STAI とする)¹⁷⁾, 日本版 Self-rating Depression Scale (以下, SDS とする)¹⁸⁾を引用し、その他は、育児関連ストレス尺度⁵⁾, 母親の年齢, 父親(夫)の年齢, 職業の有無, 子どもの人数である。

本研究における調査期間は、平成13年7月～14年3月である。

2. 測定用具

1) STAI

Spielberger, C.D. により開発されたものを中里, 水口ら¹⁷⁾が翻訳し、妥当性, 信頼性の検証についても実施済みである。構成は2つの下位尺度からなっており、それぞれ20項目である。そのうち一つは状態不安で「有害なものとして判断したとき短時間に誘発される不安状態」を意味し、もう一つは特性不安で「人格ともいえるべき生来もっている不安」を意味する。回答は4段階評定で求め、下位尺度ごとに合計点を算出し、得点が高くなるほど不安が強いことを意味する(範囲: 20～80点)。

2) SDS

W.W.K. Zung により開発されたものを福田,

小林¹⁸⁾が翻訳し、妥当性, 信頼性の検証についても実施済みである。SDSは抑うつ性尺度であり、「抑うつ性」とは「抑制性」と「憂うつ性」のことであるが、単に「うつ性」ということもある。質問は20項目から構成され、4段階評定で回答を求め、合計点を算出する。SDSも得点が高くなるほど抑うつ状態が強いことを意味する(範囲: 20～80点)。

3) 育児関連ストレス尺度

6か月児をもつ母親を対象に佐藤ら⁵⁾によって分析・開発されたもので、27項目で構成されている。育児関連ストレスとは、心理学ストレスの概念・理論に基づき「子どもや育児に関する出来事や状況などが、母親によって脅威であると知覚されることやその結果母親が経験する困難な状態」であると定義されている。育児関連ストレス尺度は、27項目中11項目が子ども関連育児ストレス、10項目が母親関連育児ストレスとされている。回答を4段階評定で行い、今回の調査では「全く悩んでいない」を0点、「たまに悩んでいる」を1点、「よく悩んでいる」を2点、「非常に悩んでいる」を3点と得点化し、子ども関連育児ストレス11項目の合計得点を子ども関連育児ストレス得点、母親関連育児ストレス10項目の合計得点を母親関連育児ストレス得点とした。すなわち、得点が高いほどストレスが高いことを示す(範囲: 子ども関連育児ストレス得点; 0～33点, 母親関連育児ストレス得点; 0～30点)。

3. 分析方法

各項目、各尺度を単純集計した後、STAI(状態不安, 特性不安), SDS, 子ども関連育児ストレス, 母親関連育児ストレスとの関連はSpearmanの両側検定を行った。そのうち精神状態を表す尺度と子ども関連育児ストレス, 母親関連育児ストレスとの間に有意な関連が認められたものについては、さらに各項目について関連を検討した。分析に先立ち、各尺度の信頼性の検定を行ったところ、クロンバッチ α 係数は、状態不安が0.93, 特性不安は0.92, SDSは0.66であった。また子ども関連育児ストレスは0.87, 母親関連育児ストレスは0.70であった。

なお、統計処理はSPSS11.0 for Windowsを

使用し, $p < 0.05$ をもって有意とした。

Ⅲ. 結 果

1. 対象の属性

対象の属性を表1に示す。母親の平均年齢は 29.3 ± 3.4 歳であり, 父親(夫)の平均年齢は 31.1 ± 4.5 歳であった。また育児休業中の者も含め, 現在職業をもっている者は38.5%であった。今回出産した児以外にすでに子どもがいる者は20.5%であり, いずれも1人であった。

2. 育児関連ストレス各項目の割合

育児関連ストレス各項目の割合を図1に示す。母親らが悩んでいる, つまり「たまに悩んでいる」, 「よく悩んでいる」, 「非常に悩んでいる」を合わせた回答率が最も多かったものは, 「情報が多くて混乱する」の53.8%であった。その他, 「(子どもの) 睡眠時間がまちまち」46.2%, 「(子どもの) 寝つきが悪い」43.6%, 「(子どもが) 激しく泣く」43.6%の順で多くみられた。一方, 「全く悩んでいない」と回答された項目は, 「子どもと相性があわない」97.4%, 「(子

どもが) おとなしい」84.6%, 「夫を煩わせて悪い」84.6%, 「子どもを放りだしたい」76.9%, 「子どもに接する時間がとれない」76.9%の順に多かった。

表1 対象の属性

n=39

変 数	カテゴリー	分 布
母親の年齢		平均 29.3 ± 3.4 歳
	20～24歳	5人(12.8%)
	25～29歳	12人(30.8%)
	30～34歳	20人(51.3%)
	35歳以上	2人(5.1%)
父親(夫)の年齢		平均 31.1 ± 4.5 歳
	22～24歳	3人(7.7%)
	25～29歳	11人(28.2%)
	30～34歳	18人(46.2%)
	35歳以上	7人(17.9%)
母親の職業	有 ^{*1)}	15人(38.5%)
	無	24人(61.5%)
子どもの人数 ^{*2)}	0人	31人(79.5%)
	1人	8人(20.5%)

*1) 育児休業中も含む

*2) 今回出産した児以外の子どもの人数

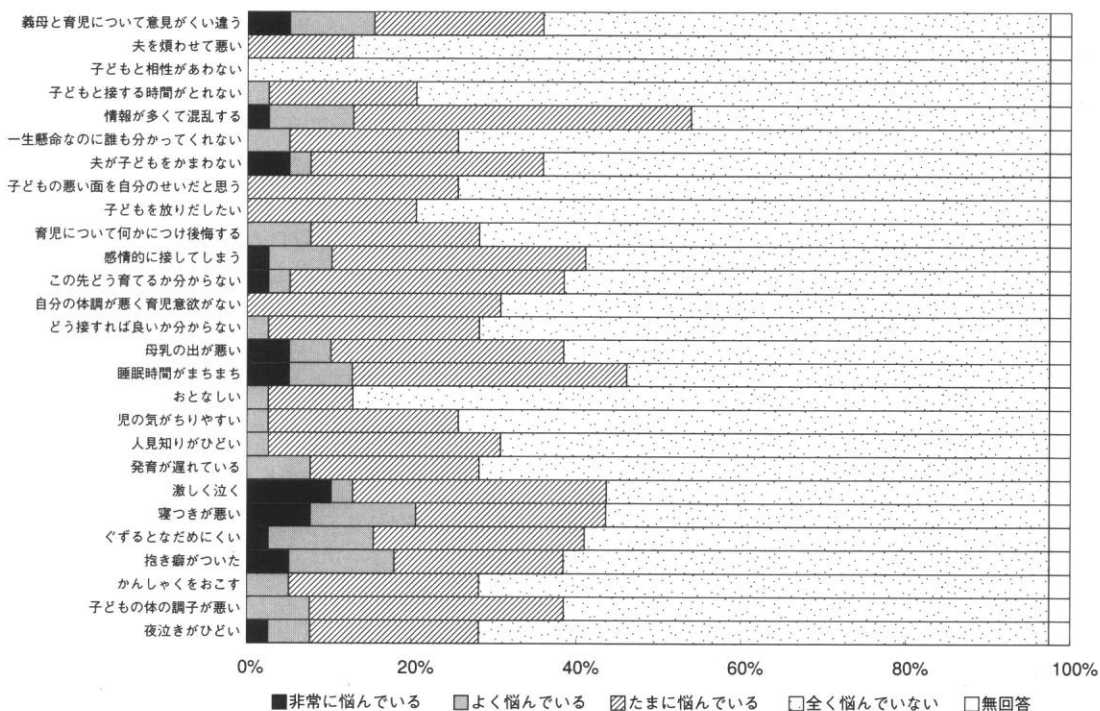


図1 育児関連ストレス各項目の割合

3. STAI, SDS, 子ども関連育児ストレス, 母親関連育児ストレスの各得点

STAI, SDS, 子ども関連育児ストレス, 母親関連育児ストレスの各得点を表2に示す。各尺度の平均得点±標準偏差は, 状態不安が40.6±10.2点, 特性不安が42.8±10.2点, SDSは39.4±6.2点であった。子ども関連育児ストレスは5.6±5.5点, 母親関連育児ストレスは3.8±3.2点であった。

4. STAI, SDS, 子ども関連育児ストレス, 母親関連育児ストレス各々の関連

STAI, SDS, 子ども関連育児ストレス, 母親関連育児ストレス各々の関連を表3に示す。今回, 育児期にある母親の精神状態の指標として用いたSTAI, SDSは相互に有意な正の相関が認められた ($p<0.01$)。また, 子ども関連育児ストレスはSDSと有意な正の相関が認められ ($p<0.05$), 母親関連育児ストレスではSTAI, SDSともに有意な正の相関が認められた ($p<0.01$)。これは, 子ども関連育児ストレスが高い者ほど抑うつが強く, 母親関連育児ストレスが高い者ほど不安や抑うつが強いことを示す。さらに, 子ども関連育児ストレスは母親関連育児ストレスとの間に有意な正の相関が認められた ($p<0.01$)。

表2 STAI, SDS, 子ども関連育児ストレス, 母親関連育児ストレスの各得点

尺 度	人数	M±SD
状態不安	39	40.6±10.2
特性不安	39	42.8±10.2
SDS	39	39.4± 6.2
子ども関連育児ストレス	38	5.6± 5.5
母親関連育児ストレス	38	3.8± 3.2

各尺度と対象の属性との関連では, 母親の年齢と子ども関連育児ストレスのみ有意な負の相関が認められ ($p<0.05$), 母親の年齢が低いほど子どもに関するストレスが高くなっていた。

5. 子ども関連育児ストレス, 母親関連育児ストレスの各項目とSTAI, SDSとの関連

結果4 (表3) で子ども関連育児ストレス, 母親関連育児ストレスと有意な関連が認められた精神状態の尺度について, さらに具体的な質問項目との関係を分析した。

表4-1に示すように, 子ども関連育児ストレス項目の中でSDSと有意な正の相関が認められた項目は, 「かんしゃくをおこす」 ($r=0.35$, $p<0.05$), 「ぐずるとなだめにくい」 ($r=0.39$, $p<0.05$), 「寝つきが悪い」 ($r=0.44$, $p<0.01$), 「睡眠時間がまちまち」 ($r=0.38$, $p<0.05$) であり, 子どもの「かんしゃくをおこす」, 「ぐずるとなだめにくい」, 「寝つきが悪い」, 「睡眠時間がまちまち」ということで悩んでいる者ほど抑うつが強かった。

表4-2に示すように, 母親関連育児ストレス項目の中で状態不安と有意な正の相関が認められた項目は, 「どう接すれば良いか分からない」 ($r=0.33$, $p<0.05$), 「この先どう育てるか分からない」 ($r=0.35$, $p<0.05$), 「感情的に接してしまう」 ($r=0.36$, $p<0.05$), 「育児について何かにつけ後悔する」 ($r=0.53$, $p<0.01$), 「子どもを放りだしたい」 ($r=0.58$, $p<0.01$) であり, 母親自身が子どもと「どう接すれば良いか分からない」, 「この先どう育てるか分からない」, 「感情的に接してしまう」, 「育児について何かにつけ後悔する」, 「子どもを放りだしたい」と悩んでいる者ほど状態不安が強

表3 STAI, SDS, 子ども関連育児ストレス, 母親関連育児ストレス各々の関連

尺 度	状態不安	特性不安	SDS	子ども関連育児ストレス	母親関連育児ストレス
状態不安					
特性不安	0.50**				
SDS	0.43**	0.71**			
子ども関連育児ストレス	0.23	0.31	0.39*		
母親関連育児ストレス	0.54**	0.51**	0.44**	0.58**	

Spearmanの相関係数
有意確率は両側検定による

* $p<0.05$, ** $p<0.01$

かった。特性不安と有意な正の相関が認められた項目は、「どう接すれば良いか分からない」($r=0.35$, $p<0.05$), 「感情的に接してしまう」($r=0.53$, $p<0.01$), 「育児について何かにつけ後悔する」($r=0.48$, $p<0.01$), 「子どもを放りだしたい」($r=0.34$, $p<0.05$), 「子ども

表4-1 子ども関連育児ストレスの各項目とSDSとの関連

子ども関連育児ストレス	SDS
夜泣きがひどい	0.25
子どもの体の調子が悪い	0.14
かんしゃくをおこす	0.35*
抱き癖がついた	0.28
ぐずるとなだめにくい	0.39*
寝つきが悪い	0.44**
激しく泣く	0.30
発育が遅れている	0.25
人見知りがひどい	0.21
児の気がちりやすい	0.31
睡眠時間がまちまち	0.38*

Spearmanの相関係数 * $p<0.05$, ** $p<0.01$
有意確率は両側検定による

表4-2 母親関連育児ストレスの各項目とSTAI, SDSとの関連

母親関連育児ストレス	状態不安	特性不安	SDS
どう接すれば良いか分からない	0.33*	0.35*	0.49**
この先どう育てるか分からない	0.35*	0.19	0.10
感情的に接してしまう	0.36*	0.53**	0.35*
育児について何かにつけ後悔する	0.53**	0.48**	0.30
子どもを放りだしたい	0.58**	0.34*	0.40*
子どもの悪い面を自分のせいだと思う	0.27	0.40*	0.21
夫が子どもをかまわない	0.27	0.20	0.19
情報が多くて混乱する	0.05	0.08	0.20
子どもに接する時間がとれない	0.00	0.11	0.21
夫を煩わせて悪い	0.08	0.03	-0.09

Spearmanの相関係数 * $p<0.05$, ** $p<0.01$
有意確率は両側検定による

の悪い面を自分のせいだと思う」($r=0.40$, $p<0.05$)であり, 「どう接すれば良いか分からない」, 「感情的に接してしまう」, 「育児について何かにつけ後悔する」, 「子どもを放りだしたい」, 「子どもの悪い面を自分のせいだと思う」という内容で悩んでいる者ほど特性不安が強かった。SDSと有意な正の相関が認められた項目は, 「どう接すれば良いか分からない」($r=0.49$, $p<0.01$), 「感情的に接してしまう」($r=0.35$, $p<0.05$), 「子どもを放りだしたい」($r=0.40$, $p<0.05$)であり, 「どう接すれば良いか分からない」, 「感情的に接してしまう」, 「子どもを放りだしたい」という点で悩んでいる者ほど抑うつが強いことが明らかとなった。

しかし, 母親らが最も悩んでいると回答した「情報が多くて混乱する」は, STAI, SDSとの間に有意な差は認められなかった。

Ⅳ. 考 察

1. 育児ストレスの特徴

本研究では, 育児関連ストレス尺度から6か月児をもつ母親の育児ストレスの特徴を調査した。その結果, 「情報が多くて混乱する」, 「(子どもの) 睡眠時間がまちまち」, 「(子どもが) 寝つきが悪い」, 「(子どもが) 激しく泣く」で悩んでいる人が多かった。情報化時代の現代では, 育児雑誌やインターネット等のメディアから容易に情報が入手できるようになった反面, 逆に情報と現実とのギャップに悩んだり, 多種多様な情報を適切に選択できず混乱することが推測される。また, 6か月児は月齢に伴い感覚・神経系が発達し, 情緒の分化が起こり, 以前のような睡眠中心の生活から積極的な探索的行動をとるようになるため¹⁹⁾, 刺激によっては恐怖や嫌忌からの啼泣がみられたり, 夜泣きが始まる場合もある。児の啼泣の仕方や睡眠パターンの変化は, 育児経験が少なく, 核家族のため他人に気軽に相談できない母親にとって非常にストレスフルな状況であると考えられる。しかしながら以上のような状況下においても, 6か月児の母親らは「子どもと相性があわない」, 「子どもを放りだしたい」など否定的な反応は少なかった。

これらのことから, 母親の育児情報選択のた

めのサポートや気軽に相談できる場の充実が必要である。

2. 育児期の母親の精神状態

一般成人女性の状態不安、特性不安の平均得点±標準偏差は、それぞれ 36.9 ± 9.5 点、 39.5 ± 9.3 点である¹⁷⁾。本対象はいずれも正常範囲内にあったが、一般女性の平均得点より高かった。育児期の女性を対象とした松岡らの研究¹¹⁾においては、1か月児の母親の状態不安 40.9 ± 8.8 点、特性不安 40.4 ± 9.8 点、1歳児の母親の状態不安 40.4 ± 8.8 点、特性不安 41.9 ± 9.3 点、3歳児の母親の状態不安 42.1 ± 7.4 点、特性不安 43.7 ± 9.8 点であった。これらのことから、6か月児の母親の状態不安は、1か月児、1歳児をもつ母親とはほぼ同値であったが、3歳児の母親よりも低く、乳児期の母親の状態不安は変動が少ないといえる。

抑うつにおいても、正常女性の平均得点±標準偏差は 35.7 ± 14.8 点であり、本対象は正常範囲内であったが正常女性の平均得点より高かった。育児期を対象とした調査結果と併せてみると、武田ら¹²⁾の3か月児の母親の 37.3 ± 7.5 点より高く、服部ら²⁰⁾の13か月児の 40.8 ± 7.8 点よりわずかに低かったことから、子どもの年齢が高くなるほど抑うつが強くなっているといえる。

以上のことから、6か月児をもつ母親の精神状態は良好とはいえず、さらなる悪化を防止するために注意が必要といえる。

著者らと同じ6か月児の母親を対象とした佐藤ら⁵⁾の研究では、 37.3 ± 6.3 点と本調査結果よりも低かった。これは10年前の結果であり、生活環境や育児の考え方の変化が影響しているものと推察される。

3. STAI, SDSと子ども関連育児ストレス、母親関連育児ストレスとの関連

今回、子ども関連育児ストレスはSDSと、母親関連育児ストレスはSTAI、SDSと有意な正の相関が認められ、子どもに関するストレスは抑うつと、母親に関連するストレスは不安や抑うつと関連があることが実証された。このことから、育児ストレスを取り除くことで、精神状

態がよくなると考えられる。とくに6か月児の母親の精神状態は子ども関連育児ストレスより母親関連育児ストレスと強く関連していることが明らかとなった。母親関連育児ストレスを除くことで、精神状態の悪化が軽減すると考えられる。

ただし、佐藤ら⁵⁾の結果と同様、子ども関連育児ストレスと母親関連育児ストレスは正の相関があった。6か月児は、情緒の中でも不快が不快、怒り、嫌悪、恐れに分化していくことで今までより表現が多様になることから、母親がその対応に困難をきたし、ストレスが高くなることも考えられる。したがって、子ども関連育児ストレスを解消することは、母親関連育児ストレスの軽減に繋がると推察される。

さらに具体的質問項目をみると、母親の精神状態は、子ども関連育児ストレスの中でも不快な状況や睡眠に関する項目と、母親関連育児ストレスは子どもとの関係や接し方に悩む項目と有意な関連が認められた。子どもの不快な状況や睡眠について悩みがある場合、母親は抑うつ傾向になりやすく、子どもとの関係や接し方、とくに他人のせいとか先々のことというより、母親自身の今その時に感じる悩みが精神状態に大きく影響していることが明らかとなった。川井ら⁴⁾は、「よく泣いてなだめにくい」、「訳も分からず泣く」、「あまり眠らない」といった泣くことや睡眠に関することは、育てにくさを示す乳児の気質(Difficult Baby)であり、これらは育児に対する母親の意欲や自信を失わせ、母子関係の形成と発達を困難にすると述べている。藤田ら²¹⁾も乳児をもつ母親が我が子を憎らしいと思った時の子どもの状況として、「泣く時」と「寝ない時」が多く、母親の状況は「疲れていた」、「イライラしていた」が多いことを報告していた。

6か月児の母親の育児指導・育児支援を行う際、子どもに啼泣、不快な状況、睡眠に問題がある場合は、ニーズにあった適切な情報を示すと同時に、子どもとの関係や接し方について改善されるようにサポートする。それにより、母親と子どもとの関係がよくなり、子どもを肯定的にとらえることができるようになり、母親の意欲や自信に繋がり精神状態がよくなると考え

られる。

一方, 最も多くの者が「情報が多くて混乱する」と悩んでいたにも関わらず, 母親の精神状態に影響していないことが明確となった。多種多様な情報社会の中で生活している現代人にとっては, 育児情報もその1つであり, 混乱はするが, 精神状態を左右するという特別なことではないとの見方もできると考えられる。

4. 研究の限界と今後の課題

最後に, 今回は精神状態と育児ストレスの関係性は実証されたものの, 要因間の因果関係は明らかではない。今後は育児期にある母親の精神状態の構造分析について包括的に行うため, 本対象の縦断的調査を現在進めている。また本研究の対象は, 自ら育児支援事業に参加した者であり, 育児や自分自身に関心が高い集団と思われる。調査地域が限定されていること, 対象数が少ないことなどから, 結果の一般化には限界があることを申し添える。

V. 結 論

50人の母親を対象に質問紙調査を行い, 育児指導の参考とするため, 6か月児をもつ母親の精神状態を明らかにし, 育児ストレスとの関連性を分析した。その結果, 以下のような結果を得た。

- ① 育児関連ストレス項目において, 母親らが最も悩んでいると回答したものは, 「情報が多くて混乱する」の53.8%であった。
- ② 精神状態についての各尺度の平均得点±標準偏差は, 状態不安が 40.6 ± 10.2 点, 特性不安が 42.8 ± 10.2 点, SDSは 39.4 ± 6.2 点であった。子ども関連育児ストレスは 5.6 ± 5.5 点, 母親関連育児ストレスは 3.8 ± 3.2 点であった。
- ③ 子ども関連育児ストレスはSDSと有意な正の相関が認められ ($p < 0.05$), 母親関連育児ストレスではSTAI, SDSともに有意な正の相関が認められた ($p < 0.01$)。
- ④ 子ども関連育児ストレスは, 母親関連育児ストレスとの間に有意な正の相関が認められた ($p < 0.01$)。
- ⑤ STAI, SDSは, 子ども関連育児ストレ

スの中でも不快な状況や睡眠に関する項目と, 母親関連育児ストレスは子どもとの関係や接し方に悩む項目と有意な関連が認められた。

- ⑥ 最も多くの者が「情報が多くて混乱する」と悩んでいたにも関わらず, STAI, SDSとの間には有意な関連は認められなかった。

以上のことから, 6か月児の母親の育児指導・育児支援を行う際, 子どもに啼泣, 不快な状況, 睡眠に問題がある場合は, ニーズにあった適切な情報を示すと同時に, 子どもとの関係や接し方について改善されるようにサポートすることが必要と考えられる。

謝 辞

本研究の趣旨をご理解いただき, ご協力くださった保健所の職員の皆様, 参加者の皆様に深く感謝します。

引用文献

- 1) 牧野カツコ. 乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉. 家庭教育研究所紀要 1982; 3: 34-55.
- 2) 牧野カツコ. 〈育児不安〉概念とその影響要因についての再検討. 家庭教育研究所紀要 1989; 10: 23-31.
- 3) 川井 尚, 庄司順一, 千賀悠子, 他. 育児不安に関する臨床的研究Ⅲ. 日本総合愛育研究所紀要 1997; 33: 35-56.
- 4) 川井 尚, 庄司順一, 千賀悠子, 他. 育児不安に関する臨床的研究Ⅴ—育児困難感のプロファイル評定質問紙の作成—. 日本子ども家庭総合研究所紀要 1999; 35: 109-143.
- 5) 佐藤達哉, 菅原ますみ, 戸田まり, 他. 育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連. 心理学研究 1994; 64(6): 409-416.
- 6) 奈良間美保, 兼松百合子, 荒木暁子, 他. 日本版Parenting Stress Index (PSI) の信頼性・妥当性の検討. 小児保健研究 1999; 58(5): 610-616.
- 7) 吉田弘道, 山中龍宏, 巷野悟郎. 育児不安スクリーニング尺度の作成に関する研究 — 1・2か月児の母親用試作モデルの検討—. 小児保健研究 1999; 58(6): 697-704.

- 8) 蛭田由美, 亀井睦子, 増子恵美. 産後の母親の不安の変化と要因(第2報)苛立事尺の結果から. 母性衛生 1999; 40(2): 332-339.
- 9) 亀井睦子, 増子恵美, 蛭田由美. 産後の母親の不安の変化と要因(第1報) —STAIの結果から—. 母性衛生 1999; 40(2): 325-331.
- 10) 昆野裕香, 柳原真知子, 神林玲子, 他. 退院後1週間以内の褥婦の不安. 母性衛生 2002; 43(2): 348-356.
- 11) 松岡治子, 行田智子, 今関節子, 他. 妊娠期・産褥期・育児期の母親の不安について —日本版STAIを用いた横断的研究—. 母性衛生 2002; 43(1): 13-17.
- 12) 武田 文, 宮地文子, 山口鶴子, 他. 産後の抑うつとソーシャルサポート. 日本公衆衛生雑誌 1998; 45(6): 564-571.
- 13) 奥石 薫. 母子相互交渉の質と母親の育児不安及び子どもの言語発達との関連性. 小児保健研究 2002; 61(4): 584-592.
- 14) 山中龍宏, 飯島純夫, 山縣然太郎, 他. 育児不安への対応 その3. 幼児をもつ母親のストレスの要因について. 平成8年度厚生省心身障害研究効果的な親子のメンタルケアに関する研究 1996: 98-103.
- 15) 森ウメ子. 幼児期の子育てにかかわる母親の意識と子どもの健康状態との関連性 —STAI(状態不安)による分析—. 看護技術 1995; 41(5): 98-104.
- 16) 前川喜平. 生育小児科学. 初版第2刷 東京: 診断と治療, 1998: 69.
- 17) 水口公信, 下仲順子, 中里克治. 日本版STAI使用手引. 京都: 三京房, 1991.
- 18) 福田一彦, 小林重雄. 日本版SDS使用手引. 京都: 三京房, 1983.
- 19) 16) 前掲書. 174-175.
- 20) 服部律子, 中嶋律子. 産褥早期から産後13か月の母親の疲労に関する研究(第2報) —マタニティブルーと産後の抑うつ症状—. 小児保健研究 2000; 59(6): 669-673.
- 21) 藤田麻美, 飯田美代子, 森田せつ子, 他. 乳児を持つ母親の児に対する憎らしい感情に関する研究. 母性衛生 2001; 42(4): 539-544.